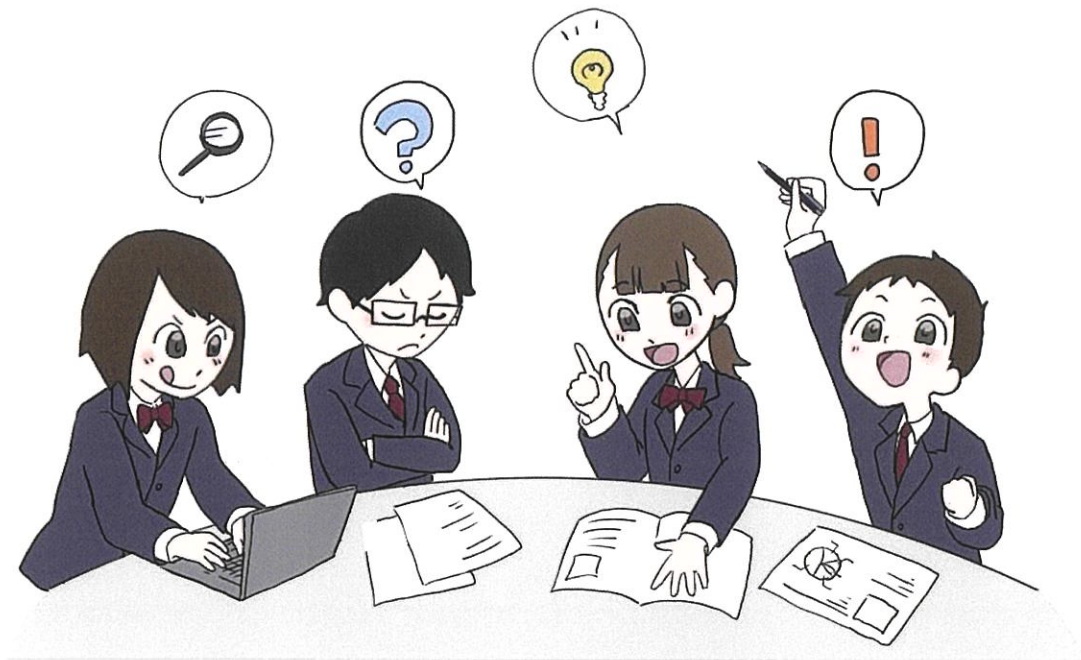


TAMBA Mirai Project

「丹波から TAMBA へ」

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）



2021 年度（令和 3 年度）活動報告集

兵庫県立柏原高等学校

TAMBA Mirai Project 丹波からTAMBAへ

～グローバルな視点で丹波の課題解決に主体的に取り組むグローバルリーダーの育成～ 兵庫県立柏原高等学校



SDGsのテーマに関連する地域課題を海外の学校を含めたコンソーシアムで共同研究

- 高齡化、人口減少・流出への対策 雇用促進、地域医療の充実、定住・移住促進 等
- 豊かな自然環境との共存、有効活用 防災対策、里山、丹波菫を生かしたグリーンツーリズム 等

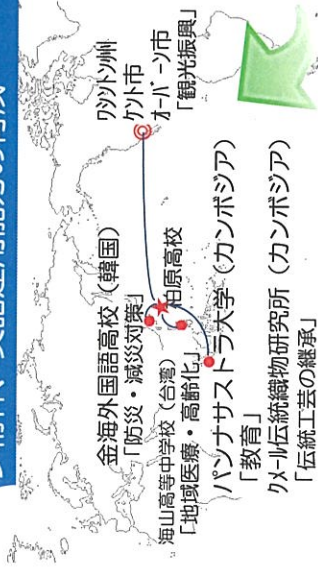
SGHアソシエイト校(H26～H30)
ひょうごスパーハイスクール(H30)

グローバル

世界の人々との協働に必要な国際的視野、チャレンジ精神、英語運用能力の育成

ローカル

地域の活性化や課題解決に必要な地域理解力、発案力、実践力の育成

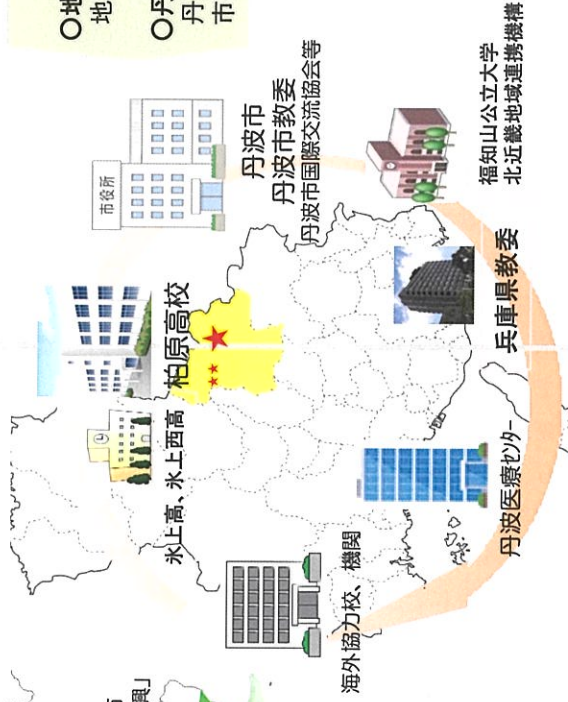


海外の教育機関との共同研究

- テレビ会議等の活用
- 現地への訪問、フィールドワーク
- 「グローバル・サミット」の開催
海外連携校をテレビ会議で結び、研究成果を共有、共同提案書等の作成
- 国際機関等への提言(例)医療問題→WHO

高度な英語運用能力の育成

- ICTを活用した英語教育
タブレット端末の活用による発信力の育成
- 丹波イングリッシュキャンプ
中学生を招いた英語漬けの合宿



地域活性化策の提案

- 地域に関する課題研究(丹波学)
地域を知り、課題を見つけ、解決策を研究
- 丹波市議会☆ミライプロジェクト
丹波市内の2つの高校と共同で地域活性化策を市議会に提案

地域を支えるキャリア教育

- ローカルキャリア養成セミナー
- 地域医療系人材養成プログラム
- 地域公務員養成プログラム
- 起業マインド養成プログラム

在住外国人との共生

- 英語でしゃべらんち
在住外国人を昼休みに招き、英語で交流
- 外国人から見た地域課題の検証
外国人も住みやすい町づくりの研究

「地域課題から世界を考える日」の開催

- コンソーシアムに加え、地域住民、在住外国人も招いて、研究成果を発表
- 丹波を通して、地球規模の課題について共に考える

丹波の課題＝世界の課題 と捉え、「ローカル」×「グローバル」な視点で課題研究
協働の中で培われる課題解決力でTAMBAを支えるリーダー育成

【巻頭言】「丹 BAL」から「グローバル」へ ～柏原モデルを目指して～

兵庫県立柏原高等学校長 大垣 喜代和

一向に終息の気配を見せない新型コロナウイルス、文科省研究指定の最終年を迎えた本校は、大学や地域で開催される事業にオンラインではありましたが、積極的に参加し探究の成果を発表しました。昨夏のオープン・ハイスクールでも、中学生や保護者の前で探究学習の成果を発表することができました。今後はさらに自分の出身中学校に出向き、「柏原高校でこんな学びをしている」と発表する機会をいただけないかと中学校にお願いしています。その発表が市内の中学校が行っている「アントレプレナーシップ教育」にもつながるのではないかと考えます。同時に、そのような機会を得ることが、自分の足りない部分を知り、改善していく大切な機会といえます。これまで柏原高校が積み上げてきた「探究」をさらに深め、生徒の活躍の場を設定できればと思います。

1年の探究学習「丹 BAL」は、15名もの地域の外部講師の方々の力を借りて「地域の魅力をおすそ分け」講座を1年間進めてきました。今後、2年生でも丹波の課題や魅力発信を継続して、「丹 BAL 台湾」を、「丹 BAL II」としようと考えています。コロナ終息後の台湾への修学旅行再開を見据えて、丹波の魅力をオンラインで台湾の学校等海外の学校に紹介し世界を知る学びにつなげます。日本国内の課題を発信すると同時に、世界各地の課題も知り、それらを解決していくための比較や研究ができるように進めてまいります。3年次の学校設定科目「グローバル」では英語での発信、さらなる国際交流、探究的な学びの継続として取組めます。これまで知の探究コースで培ってきた探究活動の取組みが、この「丹 BAL」～「グローバル」で、学校全体が地域と共に歩む学び、「柏原モデル」として提案ができるのではないかと想いを膨らませています。

しかしながら、講師の先生方からは、「調べる力」が弱いとの助言を受けています。あふれる情報の中から説得するのに必要な情報を適切に選択し活用できていないため、せっかくの発表に説得力がなくなっているとのこと。高校生の気づき、発想の面白さ、その「原石」を磨き輝かせることができるように、さらに改善を進めていくことが求められています。

地域との探究的な学びによって、地域資源を活かした活性化をめざします。地域が元気になっていくと同時に生徒が成長する機会となるのです。生徒たちは「私たちが地域をつくる」と主体的に考えるようになり、「誰かが喜ぶこと」を探究のテーマに据えていくでしょう。「誰かが喜ぶ」テーマが、探究のテーマとして成立し、生徒を主体的な学びへと導くためには、それらを進める教員や地域のさらなる体制づくりの充実が必要です。

最後に、今回の研究指定、事業推進にあたり文部科学省、県教育委員会、丹波市をはじめ多くのご支援、ご協力をいただいたすべての皆様に心から感謝申し上げますと共に、今後も引き続きご協力、ご助言をいただきますようお願いいたします。

目次

【巻頭言】兵庫県立柏原高等学校長 大垣 喜代和	
運営指導委員会委員長 高畑 由起夫(関西学院大学 フェロー)	1
運営指導委員会副委員長 杉岡 秀紀(福知山公立大学地域経営学部 准教授)	2
海外交流アドバイザー 松岡 秀司(パニャサストラ大学 教授)	4
1 研究開発実施状況報告	6
2 活動実績・年間計画	12
カリキュラム改革 和田 好史(教務部長)	18
3 丹 BAL I 「丹波の魅力をおすそ分け」	19
丹 BAL について 鴻谷 佳彦(NPO 法人 Imagine 丹波代表)	19
課題と今後に向けて 梶村 康人(1 学年主任)	20
『地域の魅力』とは 西本 秩抄(1 学年担当者)	21
問いをつくること 畑中 弘(1 年 1 組担任)	22
4 丹 BAL 台湾	23
台湾を学ぶ大切さ 野島 剛(ジャーナリスト-大東文化大学特任教授)	23
特別講演を終えて 後藤みなみ(中華民国留日神戸華僑総会 副会長)	25
国境を越えた友情	26
5 探究 II	28
探究活動の指導を終えて 土井 敬子(2 学年主任)	30
探究 II を担当して 芦田 悠(2 年 1 組担任)	31
6 総合 III	32
総合 III と指定 3 年間 藤原 一彦(総合 3 学年担当者)	32
7 学校設定科目「グローバル」	36
8 グローカルサミット 2021	38
9 第 6 回「地域課題から世界を考える日」	40
ワークシート生徒感想	41
10 運営指導委員会	46
11 生徒意識調査	49
調査結果より	60
12 生徒作品	64
丹 BAL I	64
丹 BAL 台湾	65
探究 II	70
グローバル	74
13 新聞記事	78
14 研究紀要	85
探究 I	85
研修	91

「丹波から TAMBA へ」を踏まえ、さらにその先に何をを目指すべきか？

運営指導委員会委員長 高畑由起夫（関西学院大学フェロー）

TAMBA Mirai Project は「丹波の地域課題解決に主体的に取り組むグローバルリーダーの育成」を目標に、新型コロナウイルス等の影響を受けつつも、生徒と教職員の皆さんの努力や、地元からのご支援で成果を上げてきました。ここでは、この Project で何が達成されたか、そして、その先に何をを目指すべきか考えたいと思います。

まず、最大の成果は生徒の皆さんに様々な“気付き”をもたらしたことです。丹波三宝、外国籍の方々との交流、川裾祭り等の多様なテーマが取り上げられてきました。さらに、その気付きを表現するためのプレゼンテーション・スキルの向上が挙げられます。テーマの選択では生徒の皆さんのオリジナリティが、内容についてはそれを支えるリアリティが、そして全体をあますことなく他者に伝えることについてストーリーが問われました。

さらに重要なことは外の世界とのつながり、それも外界を知るだけではなく、他者との比較で自らを知り、そしてそれを外へ発信・議論する能力です。これこそがグローバルな教育と言えるでしょう。先日は韓国・台湾・国内の高校生と結ぶグローバルサミットを拝聴しましたが、発表内容はもとより、議論をリードする司会のスキルにも感心しました。

こうした取り組みは大学や社会でどのように評価されるでしょうか？ 私的な体験で恐縮ですが、10 数年前、客員教員として大学院授業に参加された企業幹部の方から「なぜ、日本の大学はレポートの書き方を教えないのですか」と問われ、「本学では昔から基礎演習という科目があり、教科書も作っています」と答えたことがあります。この“レポートの書き方”とは作文にとどまらず、課題を見つけ、リサーチし、解決策を提案することを指し、探究学習そのものです。つまり、企業や社会は直面する問題に気付き、調査し、解決策を探る能力を持つ人を求めているのです。大学においても、高校でレポート・プレゼンテーションの方法を身に付ければ、そこに広い教養と深い専門教育をさずけることで“正解がまだ見つからない”諸課題に取り組む人材の育成が容易になります。

それでは、この Project の後で、どんな展開を期待すべきでしょうか？ 一つは地元と高校教育のさらなる結び付きかもしれません。例えば、大都市圏の高校と比べて、柏原高校は地域の教育の中核としてユニークな立ち位置にあります。その特性を活かすためにも、他県等でおこなわれている地域と高校を結びつける“支援コーディネーター”制度等がお薦めかもしれません。さらに大学や学会との連携も考えられます。近年、私が知っているだけでも、複数の学会が中高生の発表の場を提供する等、学術交流の機会を増やしています。これらの可能性も試してみられてはいかがでしょうか。

一方で、探究学習やグローバル教育には効率化による負担の軽減など、工夫すべき点が多々残されています。例えば、Web 上の膨大な情報を活用し、省力化を図ることも重要です。データや先行研究をきちんとした検索エンジンで探し、データサイエンスを使って分析する。とりわけ、グローバルな課題は英語で検索する。現在は、自宅の PC からでも国連統計等にも直接アクセスできるわけで、何よりも英語の勉強になるはずで、最後に、探究学習の成果を蓄積しながら、学年を超えて継承・発展させていくシステムを整えることをお薦めします。TAMBA Mirai Project ではすべてが手探りでした。そこで得られたノウハウを蓄積することで、効率化を図りながら、個々の探究を深化する。そのためのシステム作りこそ、この Project を後世に活かす重要事項かもしれません。

丹波発！きらりと輝くグローバルリーダーの輩出校、柏高へのエール

運営指導委員会副委員長 杉岡 秀紀（福知山公立大学地域経営学部准教授）

兵庫県立柏原高等学校（以下、柏高）が取り組む「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」もいよいよ3年目を迎え、ホップ・ステップ・ジャンプの総仕上げのフェーズに入った。蛇足であるが、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」については、複数高校が採択されているのは山形県、福井県、愛知県、兵庫県、島根県、宮崎県など限られた都道府県のみである。「グローバル型」で柏高と兵庫高校、「地域魅力型」で生野高校と村岡高校、「プロフェッショナル型」で佐用高校と5校も採択されている兵庫県はこの分野において頭一つ抜けている。とりわけ県内5校のうち3校は丹波市、朝来市、香美町と県北部に立地し、県北部にある高校の健闘が光る。

前置きが長くなったが、小稿では、運営指導委員の一人、また近隣大学の教員という立場から、柏高の令和3年度の事業を概括し、若干の講評を試みたい。

本事業も基本的な枠組みは、（1）地域課題に関する課題研究、（2）国際交流等の促進、（3）高度な英語運用能力の育成、（4）地域理解、活性化策の提案、（5）キャリア教育の推進、（6）在住外国人との共生、（7）カリキュラムの研究・開発の7項目から構成される。ただし、紙幅の関係もあるため、ここでは（1）（2）の令和3年度の取組みについてのみ取り上げたい。

（1）地域課題に関する課題研究について特徴的なのは、一般クラス・知の探究コースの全学生が「私たちの考える『地域の魅力』」をテーマに、年間を通して国内外に発信することを意識しながら、インプットとアウトプットの機会が体系的に組み込まれていることである。また、知の探究コースでは、さらに魅力の発信に止まらず、論文にまとめ、提言することも意識され展開された。筆者も中間発表会にオンラインで参加したが、生徒一人ひとりが自分たちで決めたテーマに対して、一生懸命に発表している姿が印象的であった。その中でも、とりわけ特筆したいのは、本プログラムに組み込まれている「丹波の魅力をおすそ分け」の存在である。このプログラムでは現場を熟知している丹波市のキーパーソン15名が外部講師となり、話題提供が行われている。また、単なるゲストスピーカーに留まらず、「伝統・継承」「自然・観光」「歴史・移住」「食文化・恐竜」「食文化・自然」の5分野に分かれ、生徒たちの探究活動の伴走まで行われている。この座組みこそまさに地域との協働そのものであり、柏高の看板コンテンツと言えるだろう。加えて「丹BAL1」というキャッチーなネーミングも好感を持てる。というのも名称が親しみやすく、また覚えやすいことは、他校との差別化ポイントになるだけでなく、生徒や教員、また地域側にとっても本事業を身近に感じるきっかけとなるからである。ともあれ、この3年間で「丹BALなくして柏高なし」という領域まで存在感が高まったと言って良いだろう。

次に（2）国際交流等の促進である。こちらは「丹BAL台湾」という名称で、台湾の2つの高校との年3回交流が行われている。本来であれば、実際に現地に訪問しての交流ができたて

あろうが、コロナの影響によりオンライン交流のみとなっている。当然のことながら、実際に現地で五感を通して感じないと分からないものは多い。この再現はオンラインでは不可能である。しかし、事前の動画作成を通じた交流をベースにし、その閲覧を前提にリアルタイムで交流するなど、費用も時間も気にせず、オンオフを最大限活用した密度の濃い交流ができるという意味ではメリットも多い。むしろ、この2年間の創意工夫により、コロナの有無に関わらず活用できる「ニューノーマルな国際交流」の型が確立された、と言えるのであろうか。

ともあれ、こうした学校挙げての「地域との協働による高等学校教育改革」の努力が実ってか、地域の中学生に柏高の魅力が伝わり、令和2年度より普通クラス、知の探究コース共に入試倍率が高まっている。これは本事業の最大の成果の一つと言えるだろうが、ひとえに柏高の先生方の努力の賜物である。また、福知山公立大学が主催する地域活性化策コンテスト「田舎カ甲子園」でも、普通クラスの1年生5名のチームが「丹波三宝をすべて盛り込んだスイーツを食べたい」というテーマでファイナリスト11団体に選ばれ、最終審査でも奨励賞を受賞した。すなわち、ここで学んだ実力が全国区であることを生徒たち自らが証明してくれた。今後「丹BAL」を経験した高校生が大学生や社会人になってどのような活躍をしてくれるか、今から楽しみである。

最後に、今年度で文部科学省採択事業としては最終年度になるかもしれないが、「翔び立て柏高！丹波からTAMBAへ」の実装のためにも継続が重要である。これは強調しても強調しきれない。ぜひ次年度以降も兵庫県教育委員会の支援の下、この「地域との協働による高等学校教育改革」のフラッグをあげ続け、丹波発のきらりと輝くグローバルリーダーの輩出校であり続けて欲しいと切に願うばかりである。

海外交流アドバイザー 松岡秀司（パンニャサストラ大学バツタンバン）

2019年に柏原高等学校（以下、柏高）の海外交流アドバイザーに就任し、母校でもある柏高の掲げる「グローバル化」への目標達成の為、主に国際交流の立場から会議や交流準備に向けて意見を出してきた。2020年に私の所属するパンニャサストラ大学バツタンバン（PUC-BB）に附属しているパンニャサストラ・インターナショナルスクール・バツタンバン（PSIS-BB）との間で協定締結を実現。しかし、その後、コロナ禍の影響もあり、それまでの様な直接協定校を訪問して交流する事は叶わなかった。とは言え、生徒の安全を第一に考えれば、この「行かない」という判断は正しかったと言える。その後も既述の通り、国際交流の視点からいくつかの提案をさせてもらってきた。

ソーシャルメディアを使って、柏高に関する情報の発信。既にInstagramでの情報発信はされていたので、さらに動画配信の実施を提案。最初は、練習も兼ねての動画撮影や配信でもいいが、頃合いを見計らい、グローバル化を視野にいれたテーマを縛り、それらを動画にして配信する事を提案。本年度、YouTube を使っての動画配信が開始され、主に協力関係にある海外の高校生との交流の様子を紹介したり、柏高を中心とした交流の場としてのグローバルサミットの様子も配信されたりしていた。

上記の動画配信をする際の基準として強く提案したのが、共通言語を英語にするという事。

本業が勉強の高校生に高めのハードルを課すのは少々酷ではあると思ったが、柏高の生徒達の必死さが伝わってくる動画となっていた。その動画が撮られている時、リアルタイムで他国の高校生達も同様にコミュニケーションを取っていた訳だが、それらの必死な様子を馬鹿にする様子もなく、むしろ柏高の生徒を応援・鼓舞するかの様に、より積極的に一緒に盛り上げていこうとする雰囲気を感じられた。これは、国際交流を図る過程で、人間関係がきちんと構築されてきた事を証明していると言える。願わくば、動画配信後、柏高や他国の高校生達が動画を見て、自分達の取り組みの様子を冷静に客観視してくれていれば、交流に対しての反省とフィードバックが実現したのではないかと考える。まだ先の話になるかもしれないが、これからは、新たにプロジェクトを立ち上げる際、その過程を最初から最後まで動画を撮り、10～15分程度の動画をいくつかに分けておく事を強く勧める。この事で、定期的に高い頻度での配信が可能になり、「柏原高校の色」を出す可能性も出てくる。加えて、チャプター付け機能の活用。この機能を使う事で、本で言う「目次」を概要欄に表示する事が可能となるので、柏高や協力関係校の生徒にとってストレスを減らした動画の視聴が可能になると言える。また、字幕を入れる事で、日本人限定ではなく、発信対象を広くする事も可能となる。例えば、生徒同士の交流が英語で行われている場合は、字幕は日本語。地元の人との交流の際、日本語が話されている時には英語の字幕を入れる事で、動画を見ようとする際に出てくる言葉の障壁を解決する事は、そう難しいものではなくなると考える。

この様に、英語を軸に置く事で、「教科」という区分けや縛りから解放される事ができる。こちらも提案したが、科学や数学の理系分野でそれぞれの単元で要点とされる内容を英語で説明するというだけでも、既に教科横断型としての授業（活動）となっている。これは、理系科目は「原理原則」を考える良い科目であり、得られる結果というのは世界共通。その際、それらのアプローチの仕方は国によって異なる事も発見できる。その上で、日本での考え方を、他国のそれと比較する事になり、良い点や改善点等も見つけられる。それらの様子を動画として記録・編集をして配信しておく事で、インターネットに接続できる者であれば、その情報を柏高だけでなく、日本国内外問わず広く「知識」の共

有が可能となる。

ただ、忘れてはいけないのは、この事業の主役は誰かという事。主役である生徒が「面白そう」「やってみよう」と思える事が第一条件。それを実現させる為には、裏方である大人のサポートは不可欠。このサポートを効果的にする為には、まずは大人がそれを実施して検証する必要がある。その様子も動画に撮って配信していく事ができれば、生徒レベルに落とし込む際に「手本」として効果的であるともいえる。昨年7月の会議で「グローバル化は大人でも難しい」との意見があったが、まったくその通り。まして、何が正解かという明確な指標がある訳でもない為、それをゼロベースで生徒に考えさせるのは酷というもの。下手をすると「あの学校（コース）に行ったら、勉強以外でも大変」という印象も持たれかねない。教師側も、普段の授業準備や部活動の顧問や進路指導等、やるべき事が山積している状態である事を考えると、状況は決して易しいものとは言えない。まして、公立学校である事を考えると、予算はもちろん、異動も教員全員について回る事も鑑みておく必要がある。担当が熱意を持って臨める教師であればグローバル化の道も見えてくる可能性がある。また、その担当教師が異動で他校へ移る際、同じ熱量できちんと内容を理解した上で引き継げる教師がいれば、その後、停滞する恐れはあったとしても衰退・消滅していく事は可能性として低くなると考える。うまくいけば、京都の堀川高校の様に、柏高の新たな魅力を創り出せるかもしれない。しかも、堀川高校のコピーではない新たな魅力となり、伝統になる可能性も十分に考えられる。繰り返しになるが、あくまで主役は生徒であるべきであり、通常の授業が最優先されるべきである。「グローバル化」についての取り組みと立ち位置は、取り組む過程で「どうしてもこの分野について分からない。何とかして解を得たい」と外側から必要性を生徒自身が感じられるものである事。知的好奇心に触発された場合、基礎部分から知ろうとする動きが期待できる。それを実現するには教科横断型の授業は、それまで興味関心がなかった教科に意識を向けさせる可能性も期待できる点で、取り組む価値があると考えられる。生徒が自身で動き出す事で、各教科への興味関心を持ち、理解を深めるきっかけになる、というのがこの事業の無理のない、本来あるべき姿なのではないかと考える。

まとめとして、「教育」を軸としたビジョンを簡潔に明示しておく事を強く勧めたい。

また、UI/UXの観点から、SNSや動画配信にも力を入れる事も同様に強く勧めたい。この際、既存の柏高のウェブサイトプラットフォームとして活用する事で、既述のSNSや動画配信をより効果的な物にする事が可能となる。

加えて、英語を軸に原理原則を考えられる活動内容の実施（教科横断型授業の実施）も勧めたい。

試行錯誤の後、既存のサービスでは十分な対応ができないと分かった場合に、予算があれば可能な限り見やすく、使いやすいウェブサイトへの根本的な変更、もしくは新規構築も検討。既述の通り、私立校と比べて予算が限られている公立校で予算のやりくりは必須項目。しかし、見方を変えれば、柏高が実践を続けて結果を出し続ける事でグローバル化のロールモデルとして他校の助けになる可能性は十分にある。（色々と試す中で足りない物を見つけるという点で、生徒達に求める事と同じ）

あと少しで私の任期は終了を迎えるが、今後も既述の事が段階的であっても、毎年着実に実施されていく事を強く望む。